

令和元年度第2回企画編集部会議事録

日 時：令和元年7月1日（月）10:05～10:45

場 所：北海道庁本庁舎5階 道史編さん室

参加者：桑原編集長、坂下副編集長、平野委員、谷
本委員、山崎委員、横井委員、小内委員、
道史編さん室（蘆原、中谷、伊藤、山本）

1 開 会

企画編集部会長（編集長）挨拶

2 議事

- (1) 道史編さん計画（案）について
- (2) 道史編さん機関誌のWEB開設について
- (3) 各（小）部会の活動状況票の確認について
- (4) その他

3 閉 会

1 開 会

○桑原編集長

ただいまから令和元年度第2回企画編集部会を開催します。先ず始めに本日の出席状況を事務局からご報告願います。

○靄原室長

本日は、奥田先生が欠席となっています。

○桑原編集長

本日の議事は3点ありまして、1つ目は道史編さん計画（案）の部分修正について、2つ目は道史編さん機関誌のWEB開設の問題について、3つ目は各部会・小部会の活動状況報告の確認について、という問題です。

最初に道史編さん計画（案）の部分修正の件ですけれども、これは2点あります。

第1点目は、第2「刊行の内容」の中にあります『北海道史概説』の誌名を、前回は『北海道史クロニクル』と説明しましたがけれども、この書名への反応を事務局が確認してみたところ、カタカナで理解しづらいのではないかという声があったことと、「クロニクル」は編年「史」という意味になり、北海道「史」がつくと意味がだぶるのではないかという指摘もあったということです。そこで、『北海道クロニクル』にしてはどうかということになりまして、概説部会の中で意見を求めたところ、了解を得たわけです。

さらに、『北海道クロニクル』の後ろに、わかりやすいように適切なサブタイトルをつけるということで合意されました。どのようなサブタイトルにするかということにつきましては、いくつかの案も出ました。例えば、「大地と人々のあゆみ」、「人間の大地の三万年史」、「先人達が築いた道」といった案ですけれども、これは参考意見に留めまして、今後更に煮詰めていくというふうに考えております。

『北海道クロニクル』の件はよろしいでしょうか。

○平野委員

1つよろしいでしょうか。別件で恵庭市史関係の仕事をしていて気付いたのですがアルファベットで「Eniwa chronicle」、それに「恵庭年代記」という漢字名も付いた小冊子が出ておりました。それを考えましても、『北海道クロニクル』の後ろに副題があった方がいいかなという感を強くしたものですから、一言お話しさせていただきます。

○坂下副編集長

上巻と下巻に別々のものを付けるということですか。

○桑原編集長

『北海道クロニクル』全体に共通のサブタイトルとして付けてもいいけれども、上巻と下巻を別個に付けるという方法もあるかと考えております。それは本を出す段階で正式に決めるということによろしいでしょうか。

（異議なし）

○桑原編集長

ではもう1つの修正点、北海道史のデジタル刊行の件につきまして、事務局から説明させていただきます。

○靄原室長

前回の部会では、デジタル化の部分の表現としては、「現代史の部分について、著作

権者や原本所蔵者から許諾を得られなかった資料部分を除き、デジタルデータによるインターネット公開を行う」「その他の刊本及び収集した資料のデジタル公開については、別途可能な範囲を検討する」となっていました。

現代史は許可が得られればデジタル化する、その他の部分は別途検討、という表現でした。この案について、先生方から、年表もデジタル公開した方がよいのではないか、あるいは刊本にCD-ROMをつけてはというご提案もいただいております。

その後、事務局であらためて各自治体史の電子化の動向を調べるとか、電子書籍に詳しい方から情報をいただくといったことがありまして、電子化はもうあたり前の時代になってきていて、電子化をするのであれば、編さんの最初の時点から電子化を前提にした取り組みをしなければいけないなど、遅ればせながら事務局として理解したところです。

例えば、10年ほど前に編さんが終了した『新札幌市史』は紙媒体だけの刊行でしたが、このたび、スキャンで読み込みOCR化し、この7月から全冊のインターネット公開の予定だそうです。読み込みデータからの手作業での修正がすごくたいへんで、著作権処理にも手間が相当かかったと、最初から紙と電子とあわせて著作権処理をしていれば、かなりスムーズだっただろうということ伺いました。

また、概説と年表の電子化につきましては、今後、紙での編集がどこまで電子媒体に反映できるのか、年表の図表形式は今はデジタルになじまないといった課題もありますし、デジタル公開されたものを改めて買って読もうということになるのかといった心配もあります。今どきはどこからでもアクセスできるようにして、紙でも電子でも存分に活用してもらい、デジタル化をすれば、学校現場でも使ってもらいやすいだろうということもあり、そういった利便性を第一に考え、すべてをデジタル化することを基本的に新しい案を考えております。

資料1の第2「刊行の内容」では、まず1として、「刊行の考え方」というのを置いて、紙と電子の両方だということをごくここで言っています。また、デジタルの世界は日進月歩が激しいため、10年後にはまったく今とは状況が違うものになっているかもしれないことから、とにかく技術の進展に応じたものにする、という表現になっています。

続いて3と4では、紙媒体での刊行と、電子媒体での刊行、と分けて記述しています。4の電子媒体の方では、現代史、概説、年表のすべてについて、検索可能なデジタルデータによるインターネット公開を行うとしています。

また次の項目では、概説と年表は、今後の技術的進歩や普及状況をふまえながら、電子書籍として頒布することの有用性を検討する、としています。

電子書籍は、今のところ小説や漫画が中心のようですが、10年後にはもっと専門的な書籍をタブレット端末で読むという時代になっているかもしれませんし、特に、若い世代を中心にそれが一般的になっているかもしれないという期待も込めて、インターネット公開とは別に、電子書籍化についても有用であれば取り入れる、という内容になっています。

また、3の紙媒体での刊行に戻っていただきますと、前回とは、刊行部数を、有償・無償とも若干落としています。これは、インターネット公開をします、電子書籍でも出すかもしれませんということになると、その分の冊子は減ってもよいのではないかとということで落としましたが、これもまた電子の普及状況もあわせて、紙で見たい人にはき

ちんと紙で届けられるような過不足のない部数を、そのときどきで厳密に算出していく必要があると思いますが、とりあえずここでは少し減らした数で置き直しています。以上が前回から変更した点です。

○桑原編集長

何かご質問はありますか。年表は電子化してもまた活字で確認したいという方がいらっしゃるのでは、売れ行きがそれほど落ちるとは思わないです。

○靄原室長

もう少し増やしますか。前は強気の5,000部でした。

○坂下副編集長

売るのは本屋に委託するのですか。

○靄原室長

書店で並ぶ感じにしたいと思っています。

○谷本委員

冊数は今、確定ではなくて、また状況に応じて判断し直すということですか。

○靄原室長

はい。よろしければ一応3,000部で置かせていただきます。

(異議なし)

○桑原編集長

電子化の話はこれで終了します。

(2) 道史編さん機関誌のWEB開設について

○桑原編集長

前回の部会では、「道史研究レポート(案)について」という議題で検討をお願いし、ご意見をいただいたところ、論文として発表するにふさわしい学術誌、いわゆる研究紀要タイプのを望むご意見と、広報誌的なものでいいのではないかというご意見とがありまして、機関誌の性格付けについて結論が出ていませんでした。今年度末には発刊したいという予定もありますので、今日部会で結論を出していきたいと考えています。

新しい案について、事務局から説明してください。

○靄原室長

前回の部会では、学会に認められるレベルの本格的な学術誌をというご意見が多かったと思います。また本格的な論文となると40,000字は必要といったご教示もいただきました。こうしたご意見を伺えば伺うほど、現事務局でそういった学術誌を維持していくのは、とても無理だと感じたところです。

今回の道史は、そもそも古い時代から全部を刊行すべきというご意見もある中で、予算や編さん期間等の問題もあることを理解していただいて、現代史中心ということでなんとかスタートしたものです。事務局の体制も、『新しい道史』を出していた『新北海道史』の時代に比べると、時期にもよりますが4分の1以下の小ささです。そうした中で無理にでも本格的な学術誌を目指していくとなれば、委員の先生の調査研究へのサポートが不十分なものになってしまったり、また刊行する本体の編さんに穴が空くようなことが十分予想されます。だからといって途中で休刊ということになれば、それこそせっかく書いていただいたのに、学術的な価値あるものとして信用されないということも

考えられ、それも困った事態になります。

一方で、道史が今どういう状況で取り組んでいるかということは、随時一般の道民の方々に情報を伝えていかなければならない時代でもありますし、加えて、単なる情報提供だけではなく、『新しい道史』が当時果たしたような、そのあとの道史研究の発展の芽みたいなのがそこにできれば一番いいと思っています。

そういったことをあれこれ考えた結果が、今回の案です。これまでの案との大きな違いは、「機関誌に載せた後でなければ研究発表できない」ということをやめたところ です。

その代わりに、普通の資料所蔵機関で見られる資料は特に問題はありませんが、道史の編さんのための資料調査ですとお願いして特別に見せてもらった、個人や団体が持っていた資料を論文中に載せる場合は、その個人や団体に対して、掲載の許可を事前にもらうこと、これは事務局が行います。また、論文の末尾に、科研費のときと同様、「道史編さんのための調査研究の成果です」と一言書いていただく、発表した論文の抜き刷りやコピーを事務局に提供してもらう、この3点が満たされればよいということにしたいと思います。

そういう前提で資料をご覧ください。まず、2のところ、この機関誌の性格は学術的情報誌とするとしております。専門的な紀要タイプではなく情報誌であるということです。

参考資料を4枚つけました。まず『新しい道史』ですが、表紙、それから構成とそれぞれの文字数を例示しました。昭和30年代、40年代、50年代から1誌ずつ上げています。論考はあっても20,000字未満でした。そのほかにも、編さんの方針や作業の情報提供、その他気軽に読めるものがたくさんありまして、北海道史に関する情報誌の要素が濃いものであると、ご理解いただけるのではないかと思います。基本的にはこういうベースで、と考えています。

参考2の「山口県史の窓」は、機関誌というわけではなくて、刊行された冊子の中に挟み込まれた全8頁のニュースレターのようなものです。資料編から読み取れることや、その周辺のことを4,000字ちょっとの量で、研究者によって書かれています。内容については「山口県史の窓」のような書きぶりが、新しい機関誌にも合うのかなと思い、例として載せています。資料編が出る前なら、各分野の特徴や、課題、資料編が出た後であれば、こういうことが分かるということでもいいですし、通史編に書き切れないことを書かれてもいいのではないかと思います。

内容的には道史に関心のある一般道民が容易に理解できるようなものにする。毎年1号ずつ刊行、これは紙ではなくホームページ上に追加するという形にしたいと思います。

誌名についてですが、「山口県史の窓」を参考にして、「北海道史の窓」、あるいは今回の道史の中心である「北海道現代史の窓」をあげています。何かよい誌名をつけていただきたいと思います。

掲載内容は、前回提案したものに、⑤講演録⑥編さん室報告などを加えています。1編あたりの分量ですが、前回は40,000字というご意見もありましたが、一般道民に対する学術的情報誌という位置づけであれば、『新しい道史』と同じくらいの、20,000字くらいまでとし、読みやすく先生方にも気軽に書いていただきやすい、平均5,000字程度でよいのではないかと思います。1号当たり、編さん室報告を除いて3～4編程度、

できるならばもっとたくさんあった方がいいですが、そのくらいでいかがかと思えます。

次に作成手順ですが、どの先生に書いていただくか、やはり各部会の専門委員の先生に全体構成の検討や執筆候補の人選をお願いしていただいた方が、よりよいものができ、スムーズに運ぶと思いましたので、この企画編集部会の元に3名くらいの先生で編集小部会を作っていただくという案です。執筆者は原則として道史編さん委員会の委員ですが、外部の方への執筆依頼も必要があれば行い、一般からの投稿募集はしません。

原稿の内容確認は、編集小部会を作ることを前提として、その小部会に予め内容確認を行っていただきます。掲載内容に原本所蔵者等の承諾を必要とするものがある場合は、事務局がその手続きを行います。謝金については、前は1枚当たりという書き方をしておりましたが、用意できるものが限られていて、しかしながら打ち切りでいくらまでというも支出の仕方としてあまり好ましくないので、1編あたりの定額で考えたいと思えます。毎年3月末の刊行、ホームページへの掲載とします。

その他ですが、編さん終了後のデータの取扱は別途検討する、逐次刊行物に与えられるISSNは、電子であろうと紙であろうと継続的に発刊するものであれば取得可能のようですので、国立国会図書館に申請します。

最後に、先ほど申しましたとおり、他の学術誌に書いていただく場合は「道史編さんのための調査研究の成果である」ことを表記していただく、ということが書かれています。以上です。

○桑原編集長

ただいま事務局から説明がありましたとおり、道史編さん機関誌の性格は本格的な研究紀要タイプではなく、『新しい道史』風の学術的情報誌という方向にしていきたいということです。

外部の大学や研究機関の紀要を皆さんの調査研究成果の発表の場として代替措置として利用していただき、その場合、末尾に「道史編さんのための調査研究の成果である」という旨を書いていただくことでいいのではないかと、というふうにしたいという提案です。

○平野委員

今の全体の構成はこれでいいと思えます。掲載の内容のところですが、旭川市史で『旭川研究』を出していた時に、執筆者が刊行時までになんか考えたとかという雑感を出したところ、それが読者にはかなり好評で、面白いと待たれていたということがありました。今回も、この企画編集部会の委員だけでもいいですし、各部会の委員でもいいですが、1年間にこのようなことを考えているということ、論文形式ではなく簡単に雑感でもいいので掲載をすれば、どのような状況で編さんが進んでいるかということや先生方の考え方も読者に分かると思えます。大変ではありますが、むしろ義務付けする必要があるかなと思ひまして、委員の先生方にある程度強制力のある形で依頼をするという1項目を設けてもいいのかなと思ひました。先生方のご意見を伺いたいと思ひます。

○桑原編集長

貴重なご意見をありがとうございました。他にはございませんか。

○横井委員

今のご意見は全員が書くということですか。

○平野委員

全員が書ければいいなと思います。

○横井委員

遠慮させていただきたいというか、時間的にもものすごく厳しいので、できるだけ避けさせていただきたいという気持ちです。会議の情報を紹介することは必要とは思いますが。

○坂下副編集長

面白いことができたという人がやった方がいいかもしれません。

○轟原室長

旭川市史では字数は何字くらいのものでしたか。

○谷本委員

千字とか二千字くらいだったと思います。コラムみたいなものですね。

○平野委員

はい。小さい頁で4分割という感じです。

○桑原編集長

では機関誌は、学術的情報誌という形式で編集していくということでご了解いただけますか。

(異議なし)

それでは早速、編集小部会を立ち上げたいと思います。事務局の方から資料の配付をお願いします。

(事務局、資料配付)

小部会の委員を平野委員、奥田委員、小内委員にお願いしたいと思いますがよろしいでしょうか。

(異議なし)

小部会長を指名したいと思います。平野委員をお願いします。旭川市史のアイディアも盛り込んでください。今年度末に出す予定の機関誌の構成につきましては、早速小部会でご検討をお願いしたいと思います。

(3) 各(小)部会の活動状況票の確認について

○桑原編集長

前回の部会では、各部会の進捗状況として、4月19日時点での部会開催状況と、簡単な調査実績を配布しました。今回配布した資料は、7月25日に開催する今年度の道史編さん委員会に報告する資料として作ったもので、6月末までになっています。調査先の様式が前回よりも詳しくなっていて、委員自身の調査のほかに、委員の指示で職員のみで事前調査したり複製に通ったりしたものも加えています。

各部会長、小部会長にお願いしたいのが、一番最後の項目で、「今後の予定」とあるところです。今年7月から来年度の6月までの1年間で、何回くらい部会を開催する予定で、また、部会の活動上どのような課題があるかを、各部会長、小部会長に、簡単に記述してほしいと思います。書き込む内容としては、企画編集部会と概説部会を参考にしてください。

7月12日(金)までに事務局にメールで知らせてください。それを書き加えまして、7月25日の道史編さん委員会での報告資料としたいと思います。

○桑原編集長

事務局に確認したところ、各部会のメンバーの中で活発に資料調査をされている方もいらっしゃるけれども、中にはほとんど動きのない方もいらっしゃるようなので、その方には各部長から、調査研究に取り組むようにご指示をお願いしたいと思います。

(4) その他

○轟原室長

6月1日からこの部屋を設けることができました。少し窮屈ですがほとんどの部会はここでできるかなと思います。また、部会以外の打ち合わせももちろんですし、資料の閲覧場所としても活用していただくよう、先生方にお伝え願います。

道新記事データを昭和20年から42年3月まで入力して、5月の連休明けにお配りしました。資料編に載せる資料そのものではあまりないかもしれませんが、構成の検討や資料調査の前段に必要なものであろうと思い、作業を急ぎましたが、この記事を送れ、あるいは見たいというお申し出が、残念なことに、あまりありません。主題別に、時系列で出来事が並ぶようにもできるようにしたので、あるいは記事そのものを見るよりも、流れを追っていくことに使っているのかもしれない。ぜひ使っていて、もっと使いやすい形で加工してほしいというご要望があれば、できるだけ応えていきますので、言っていただきたい。

以前、文書館の戦後の公文書を主題別に分類して、すぐ使っていただけるように加工したデータを現代史のすべての先生にお配りしていましたが、すっかりご放棄されている先生が多い気がします。文書館が移転のために閲覧室を閉じるのが9月末ですので、もう3ヶ月を切っています。今回改めて、現代史の全委員に、ご自分の関係する部分を抽出する形で添付して、「9月末で終わりなので急いで調査に来て下さい」というメールをお配りしようと考えています。

先月末に、札幌市から、『北海タイムス』の写真ネガの寄贈を受けたのでお知らせします。『北海タイムス』は平成10年に休刊になったのですが、その時に札幌市に写真ライブラリーがあった関係だと思いますが、写真ネガが札幌市に寄贈されたそうです。札幌市ではそのうち札幌市の分だけを整理し、現在は札幌市の公文書館で見られるようになっていますが、札幌市以外の分については手つかずで残されていました。

それを道史に使えるのではないかとわれまして、先日小さい箱に50箱以上をもらってきました。現代史の場合写真が結構たくさん使われるのではないかと思います。報道機関の写真は、紙のものでも使用料が高かったり、デジタルで流せないなどの制約があります。『北海タイムス』の写真は著作権上、そうした制約なしに使えますので、まず目録化の作業を進めているところです。

3 閉 会

○桑原編集長

それでは、委員の皆さん、この道史編さん室の部屋を大いに活用してください。その他にはないようなので、これで第二回企画編集部会を終わります。ありがとうございました。

(了)